

外国語科教員養成におけるCALL

- 外国語教育学に基礎づけられたCALLの研究と教育の必要性について -

外国語教育学会 (2003年10月11日 於東京外国語大学)

慶應義塾大学, 東京外国語大学(非常勤) 境 一三

skazumi@hc.cc.keio.ac.jp, <http://www.hc.keio.ac.jp/~skazumi/>

本日のメニュー

1. なぜ教員養成でCALLを扱うか？
2. 日本のCALLの現状
3. 教職に必要なComputer Literacy?
4. 現代の外国語教育
5. 「コンピューターとドイツ語学習研究」

なぜ教員養成でCALLを扱うか？

- Information & Communication Technology (ICT) の進歩と外国語教育を巡る「風景」の変化。
 - Internetによる「壁」の消失, authenticなソースへ直接アクセス可能。
 - 「いつか使うための勉強」から「今ここで使っている = 学習」へ。
- 学問的根拠が希薄なまま業者主導でCALL設備が導入されている日本の現状。

日本のCALLの現状

□ CALL研究の遅れ

- CALLを外国語教育学中の一分野としてきちんと位置づけなくてはならない。
- 実践報告はたくさんあるが、理論化が遅れている。
- 大学院での教育の強化が必要。

□ 実践と理論の乖離

- 実践者が40年にわたるCALLの歴史と理論を踏まえていない。
- 「お宅」からの脱却が必要。

教職に必要なComputer Literacy?

- 外国語専攻学生に必要なComputer Literacy + (CALLの知識と技能に重点を置く)
- 外国語専攻学生に必要なComputer Literacy とは何か？

Faculty of Modern & Medieval Languages, University of Cambridge
(<http://www.mml.cam.ac.uk/call/cert/>) の例

Certificate in Humanities Computing for Languages

- Introduction
- Session 01: Introduction to Computer Systems
- Session 02: Operating Systems ? PC and Mac
- Session 03: Operating Systems ? Unix
- Session 04: FTP ? File Transfer Protocol
- Session 05: Internet Services ? Using and Searching the WWW
- Session 06: Web Page Development ? Basic HTML
- Session 07: Web Page Development II ? Meta Information, Colour, and Images
- Session 08: Digital Audio
- Session 09: Digital Video
- Session 10: Databases and Bibliography
- Session 11: Electronic text: basic concepts
- Session 12: Using Electronic Texts
- Session 13: Web Page Development III ? Tables, Frames and Web Editors
- Session 14: CALL software ? Evaluation and Design
- Session 15: Hypertext and Multimedia

教員養成における +

- 教員養成の中では教授法の歴史とCALLの歴史を平行して教える必要がある。
 - Audio-Lingual Method と行動主義的CALL (60 - 70年代)
 - Communicative Approach と80年代の認知主義的CALL
 - Inter-, trans-, multi-, pluri-cultural Language Learningと現代のCALL (Internet 環境)
- 外国語教育学の最先端と切り結ぶ。

現代の外国語教育

- 知識の獲得から運用能力の獲得へ重点が移動
 - negotiation of meaning
 - Task-based, Research-based, Project-based Learning
 - Learning by doing
- 「学び」を学ぶ
 - 自分の学習に対するメタレベルの考察と、生涯続く学習の計画
 - 発見的学習, Data-driven Learning
- 「ことばを学ぶ」から「ことばで学ぶ」へ
 - Content-based Language Learning

21世紀のCALL

- 古いCALL観からの脱却
 - Drill からの脱却
 - 管理からの脱却
 - 省力化からの脱却
- 新しいCALL観の確立
 - 知識構成主義に基づく帰納的・発見的学習
 - コミュニケーション活動 = 言語学習
 - Computer 環境と対面学習の相互補完的機能の重視 Blended Learning

東京外国語大学欧米第一課程

「コンピューターとドイツ語学習研究」

- 開講年度: 2001年度(<http://www.hc.keio.ac.jp/~skazumi/gaigo2001.htm>), 2003年度
- 教職を取っている学生と取らない学生の混成
- 授業の進め方
- 授業内容(2003年度)
 - 1) 外国語教授法・学習法史
 - 2) Computer Assisted Language Learning (CALL)史
 - 3) 電子テキスト, ハイパーテキスト
 - 4) 情報検索法
 - 5) stand aloneドリル教材
 - 6) 既存CD-ROM教材の研究
 - 7) Web-based drills
 - 8) Data-drivenな学習法
 - 9) e-mail, chat, MOOを用いた学習法
 - 10) Web QuestとTask-based Learning

学生による評価 (1)

- 初期の授業では外国語学習法の歴史を学びましたが、後に利用した様々な学習用ソフトにはそれぞれ製作者による教授法の理念が反映されている事が分かりました。例えば、STORYBOARDでは語彙論や統語論の観点から学習することを主眼としていたように、幾つもの学習用ソフトから外国語教授法の多面性を学びました。

学生による評価 (2)

- コンピューターで学習者が外国語を学習することは、「ひとりで作業する」という思い込みがあったのですが、例えばリサーチ型の課題を用いるなどすると、コンピューターを用いて、グループワークも可能であり、授業を活性化する手段のひとつとしても使えることを知ったときには、目からうろこが落ちた思いでした。

学生による評価 (3)

- 「教員のあり方」だけでなく、「学習者のあり方」について考えられたところに、この授業のポイントがあったように思います。たいていの授業は教師の考えや意見のみで進行していく場合が多いですが、この授業では他の生徒が作成した教材を互いに確認し、良い点や悪い点を考えて改善していくことができたという意味で、私たち自身が発見的学習を体験していたのだと思います。言語学習者への教材作りを通して教員のあり方を考えると同時に、自分自身が学習者としてそのあり方を考えることができました。

ネガティブな評価

- ほぼ毎週、宿題が出るのは正直言ってキツかったです。
- どのソフトも授業で取り扱う時間が短すぎて、結局はあまり理解しないまま、次のものへ移ってしまい、物足りない気もした。
- 授業の参加者のPC操作が、最大のネックだったように思われます。

まとめ

- 外国語教育学の一分野としてのCALL研究の確立が急務である(特に大学院で)。
- 技術先行ではなく、教育の現場からの発想がもっとも重要である。
- 教員養成の中にCALL研究を取り入れることは、学習環境としてのICTの普及を考えると当然のことと思われる。

Danke schön!

- Kontakt:

Prof. Kazumi SAKAI, Keio Universität

- skazumi@hc.cc.keio.ac.jp

- <http://www.hc.keio.ac.jp/~skazumi/>